怒りと不安がポジティブ／ネガティブ事象の生起確率の推定に及ぼす影響について

○佐藤重隆¹ 戸梶亜紀彦²

(東洋大学大学院社会学研究科¹ 東洋大学社会学部²)

Key words: 個別のネガティブ感情, リスク認知, 感情の認知的評価理論

目 的

ネガティブ感情がリスク認知や意思決定に及ぼす影響において、怒り感情は楽観的なリスク認知を、不安や恐怖感情は悲観的なリスク認知を促進するといわれている。Lerner & Keltner (2000; 2001) は、ネガティブ感情間でのリスク認知や意思決定への影響の違いは、感情の認知的評価理論で示された、感情喚起場面に対するコントロールと確実性の次元での評価の違いが関連していることを示した。このようなネガティブ感情間のリスク認知に及ぼす影響の違いについて、より詳細なプロセスについて検討するにあたり、Lerner らの実験結果が再現可能かどうかを検討すべく、感情誘導課題を用いた実験を行った。

仮 説

怒り感情は不安感情よりも楽観的なリスク認知を行うため、ポジティブな事象が起こる確率をより高く、ネガティブな事象が起こる確率を低く回答する。

方 法

■参加者：大学生 53 名（男性 17 名、女性 36 名、平均年齢 20.28 歳、SD=1.32）。

■要因計画：1 要因被験者間計画（怒り条件/不安条件）

■感情誘導課題：「共感に関する実験」として、予備調査に基づき作成された 400 字程度のシナリオ（怒り条件：電車内の迷惑行為、不安条件：「身内の体調不良」）を黙読させた後、読んだシナリオと同じ状況に立たされたときのことをイメージさせ、その内容を口頭で回答させた。

■操作チェック項目：状況に対する認知的評価について、コントロールと確実性に関する 6 項目（11 件法）に回答させた。すべての項目は Smith & Ellsworth (1985) で用いられたものを翻訳して用いた。感情の測定については、100mm の Visual Analog Scale を用いて、怒り/不安/悲しみの感情語（それぞれ 4 項目）をどの程度感じているかを回答させた。

■事象の生起確率推定：佐藤・大久保（2013）で用いた項目に Johnson & Tversky (1983) と Wright & Bower (1992) の項目を追加した 24 項目（ポジティブ事象 8 項目、ネガティブ事象 16 項目）に対して、今後 1 年で起こる確率を 0~100 % で回答させた。

■手続き：実験は 1 人ずつ実験室で行った。参加者は最初に「共感に関する実験」として、感情誘導課題を行った。そしてこの後に操作チェック項目に回答させた。回答終了後、別の研究に関する調査として事象の生起確率の推定を行わせる質問紙に回答させた。回答終了後にはデブリーフィングを行った。

結 果

■操作チェック：認知的評価についてはコントロールの 3 項目と確実性（3 項目を平均したもの）に対して、平均値差の検定を行った。その結果、コントロールの 3 項目では、特に「状況のコントロール」において、怒り条件 ($m=5.47$, $SD=2.62$) より不安条件 ($m=7.70$, $SD=1.61$) が有意に高く ($t(53)=-3.59$, $p<.01$)、また「他者のコントロール」では、怒り条件 ($m=9.37$, $SD=1.65$) のほうが不安条件 ($m=3.78$, $SD=2.49$) よりも有意に高く ($t(43)=9.82$, $p<.01$) 想定された結果が得られた。一方で、確実性において、感情条件間での有意な差は得られなかった。

感情状態の操作について、怒りと不安に関する感情語の合計値をそれぞれ怒り得点/不安得点として、感情条件間での平均値差の検定を行った。その結果、怒り得点では怒り条件 ($m=23.89$, $SD=5.14$) が不安条件 ($m=20.27$, $SD=12.78$) よりも有意に高く ($t(53)=9.52$, $p<.01$)、不安得点では不安条件 ($m=30.71$, $SD=3.46$) が怒り条件 ($m=20.27$, $SD=3.46$) より有意に高かった ($t(53)=-5.43$, $p<.01$)。この結果から、感情状態の操作が成功したことが確認された。

■事象の生起確率：感情操作が想定通りにならなかった参加者 7 名のデータを分析から除外した。それぞれの事象の生起確率に対して、感情条件間での平均値差の検定を行った結果、ポジティブ事象においては「好きなところに旅行に行く」（怒り条件： $m=73.91$, $SD=24.40$, 不安条件： $m=59.52$, $SD=30.70$ ）と「条件のよい仕事に就ける」（怒り条件： $m=35.44$, $SD=26.19$, 不安条件： $m=20.70$, $SD=21.13$ ）で怒り条件のほうが不安条件よりも高い確率を回答した ($t(44)>1.7$, $p<.05$)。また、ネガティブ事象では「風邪をひく」で怒り条件 ($m=80.87$, $SD=18.75$) が不安条件 ($m=63.22$, $SD=26.03$) よりも高い確率を回答した ($t(44)=2.64$, $p<.01$)。他の項目で、有意な差は得られなかった。

考 察

結果から、怒り感情を誘導した条件ではポジティブな事象が起こりやすいという推定が促進される傾向がみられた。これは、先行研究でみられた怒り感情がリスク認知に及ぼす影響と一致するものであり、仮説を支持する結果が得られた。この怒り感情の影響は、特に自分で判断し達成可能なもので顕著になっていることから、推定対象の内容によって怒り感情が楽観性に及ぼす影響が促進される可能性がある。

しかし一方で、ネガティブな事象に対する生起確率の推定においては仮説と一致した結果が得られなかった。この問題について、感情誘導の特に認知的評価次元における確実性の操作が十分でなかったことと、確率推定の対象であるポジティブ/ネガティブ事象の内容および評価方法に問題があることが考えられ、これらの点について改善と、より詳細な検討が必要である。

引用文献

- Johnson, E. J. & Tversky, A. (1983). Affect, Generalization, and the Perception of risk. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 20-31.
- Lerner, J. S., & Keltner, D. (2000). Beyond valence: Toward a model of emotion-specific influences on judgment and choice. *Cognition & Emotion*, **14**, 473-493.
- Lerner, J. S., & Keltner, D. (2001). Fear, Anger, and Risk. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 146-159.
- 佐藤重隆・大久保暢俊 (2013). 運・不運の「洗浄」とリスク・テイキングの関係—Xu, Zwick, & Schwarz (2012) の概念的追試とリスク認知への影響—, 日本社会心理学会第 54 回大会発表論文集, 378.
- Smith, C. A., & Ellsworth, P. C. (1985). Patterns of cognitive appraisal in emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 813-838.
- Wright, W. F., & Bower, G. H. (1992). Mood effects on subjective probability assessment. *Organizational Behavior and Human Processes*, **52**, 276-291.

(Shigetaka SATO, Akihiko TOKAJI)